

# 「お母さんのバカ！」型の「xのy」がどのようにして生まれるのか — 参照点構造による分析 —

博士前期課程  
7M601 小柳 昇

【キーワード】 連体助詞の「の」、同格、参照点構造、メンタル・コンタクト、コト図式

## 1. はじめに

本稿は「xのy」という形式で表されるもののうち、次の発話に見られる表現を「お母さんのバカ！」型と呼び、このような表現がどのようにして成立するのかを考察したものである。

- (1) a. (母親にひどいことを言われた娘が)  
もう。お母さんのバカ！
- b. (父親に頑固に反対された息子が)  
もう。おやじの石頭！
- c. (普段から親しく接している課長にちょっとした意地悪をされた部下の女性が)  
もう。課長の意地悪！
- d. (恋人の女性につれないこと言われて、家に帰ってきた男性がそのことを思い出して)  
智子のバカ。

日本語の連体助詞の「の」が、「xのy」という形式によって2つの参加者の様々な関係を表すことができることは広く知られている事実である。例えば、高橋他(2005: 46-48)では、二者の関係を大きく6つに分けているが、下位分類を数えると合計25にのぼる。しかし、「お母さんのバカ！」<sup>1</sup>のように、「[x: 呼称名詞(または人名)]の[y: 属性を表す名詞]」という構造を持ち、「xはyだ」という意味を表すような「xのy」の用法は扱われていない<sup>2</sup>。

このタイプは、「xはyだ」という措定文の構造をもつ「山田さんは先生だ」と比べるとわかるように、xとyが特殊な配列になっている。問題の名詞句が「お母さんはバカだ」をベースにして生まれた連体修飾構造をもつと考えるなら、「山田さん(x)は先生(y)だ」から「先生(y)の山田さん(x)」が作られるように、「バカのお母さん」または「バカなお母さん」になるはずである。それが、実際は逆の配列で、「お母さんのバカ」になる。なぜこのような単語の配列をもつ「xのy」が生まれるのだろうか。

本稿では、このように「xはyだ」という命題をもちながら、「xのy」という句だけで用いられる「お母さんのバカ！」のような表現を取り上げ、それが生成される仕組みを、いくつかの角度から分析する。第2節では「xのy」の2つの名詞句の関係に注目し、2つのタイプの同格の構造と「お母さんのバカ！」型の類似点、相違点を通して、3つの問題点を提起する。そして第3節で、発話時の認知プロセスが反映された「参照点構造」(Langacker 1993)による分析を示し、第4節で「お母さんのバカ！」型の表現が、参照点構造と極めて密接に結びついていることを明らかにする。

## 2. 「お母さんのバカ」型の名詞句の特徴と問題提起

### 2.1 「の」の用法のラベリングの限界

寺村(1991:238)は、「N1のN2」の考察にあたり、試しに例文を17ほど挙げているが、そのうち用法のラベリング(「所有」「場所」など)がされているのは10で、残りの7には「?」が付けられている。この「?」は、ラベリングが不能というわけではなく、むしろラベリングすることに意義があるのかという疑問を表していると言える。そして寺村は次のような考えを示している。

#### (2) 寺村(1991:240)より(※下線は引用者による)

完全にすべての型を文法の範囲で捉えることは不可能なのかもしれない。なぜなら、二つの名詞を「ノ」で結びつけること、また(聞き手の側からいえば)その結びつきからすぐある意味を理解することの一つには、日本語についての一般知識をこえた、その時代の社会常識のようなものが関係する部分があることにもよる。

### 2.2 「xのy」における2つの名詞句の関係

「の」の用法を列挙するのは大変だが、2つの名詞句の関係がどのようなものかを探ることは意義があると考え。「お母さんのバカ！」における2つの名詞はどんな関係で結ばれていると考えたらいいだろうか。まず、名詞句の主要部がどちらかという視点で見てみる。ここで主要部というのは「句全体の範疇を規定する中心的要素」または「意味的な中心的要素(被修飾要素)」(三宅2001:9)のことで、日本語は言語類型論的に「主要部後置型」で被修飾語は修飾語の後ろに来る。その中にあって、主要部が前に来るタイプ<sup>3</sup>とどちらが主要部とも決められないタイプが存在する。本稿のテーマと関連するのは、後者のタイプで、三宅(2001:12-14)では「主要部同格型」と呼んでいる。

#### (3) 主要部同格型の例(三宅2001:12より)

- a. チューリップの花<sup>4</sup>、バラの花、スマイルの花、…… (=三宅(3))
- b. 松の木、杉の木、銀杏の木、…… (=三宅(4))
- c. 東京の町、大阪の町、神戸の町、…… (=三宅(5))

三宅は、修飾関係がある場合にはいわゆる下略の「の」が現れるが、そうでない場合は現れないこ

とを利用して、(4)のような比較をした。そして、上の(3)の2つの名詞句は修飾関係でなく、したがって同格になっていると結論づけている。句のみの「お母さんのバカ」はこのような統語上のテストに適さないが、(3)の「xのy」を「種(x)と類(y)」と見れば、どちらもyのカテゴリーに属する種(=具体例)を示している名詞句であると考えることができる。(3.3で具体的に論じる)

- (4) a. \*大阪の町は好きだが、東京のは嫌いだ。 (＝三宅(9))  
b. 大阪の町並みは好きだが、東京のは嫌いだ。 (＝三宅(10))

次にもう1つの同格のタイプを見てみる。(5)のように、「yはxである」のようなコピュラ文が基底構造にある「xのy」を同格の用法と呼ぶことがある。これは措定文「yはxである」において、「yがxという属性をもつ存在物である」と同定されることを指して、同格と呼ぶものである。

- (5) 同格の「の」と呼ばれる用法(松岡 2000 : 30-31)  
a. 局長の山岡  
b. イギリスの首都のロンドン  
c. 賞品の時計

今後の議論のために、(3)のようなタイプを〈同格1〉、(5)のようなタイプを〈同格2〉と呼ぶことにする<sup>5</sup>。〈同格2〉については、三宅(2001 : 13)が指摘しているように、主要部の位置という視点から見れば、後置型であることには変わりがない。「お母さんのバカ」は〈同格2〉の用法でないことは確かである。第1節でも少し触れたが、もし同じだとしたら、「お母さんのバカ」ではなく、「バカのお母さん」または「バカなお母さん」にならなくてははいけないからである。

同格の用法において第一に注目すべき点は、〈同格2〉において(5a)のように固有名詞(人名)が来る場合には、「局長の山岡」であって、「山岡の局長」とは言えないことである。「yはxである」を基底構造にもつという点では、両者は同じように見える。コピュラの「だ(である)」が「の」になるのなら、なぜ「局長は山岡である」から「山岡の局長」は生まれえないのか。

- (6) a. 山岡は局長である。→ 局長の山岡(に会った)。  
b. 局長は山岡である。→ \*山岡の局長(に会った)。

これについては、(6a)は措定文で、(6b)は倒置指定文であり、両者は見かけ上同じ「～は～である」となっているが、文の構造が異なるからだと説明できるかもしれない。つまり、(6b)は「だれが局長か」という疑問が前提となった答えであり、「山岡が局長である」の主語と述語が倒置されて「局長は山岡である」になったと考えるわけである。しかし、これで「山岡の局長」が排除されることが十分に説明されたとは言えないだろう。〈同格1〉との類似点を指摘した「お母さんのバカ」型の

名詞句は、実は次のような指示的な用法で使われることがある。「山岡の局長」は不可で「太郎のバカ」が可なのはなぜか。これは〈同格1〉と〈同格2〉の違いに起因していると考えられるが、「お母さんのバカ！」とのつながりで説明される必要があるだろう。

- (7) a. 太郎のバカがやっと帰ったよ。  
b. 「あれ、太郎君がまだ来ていないね」  
「太郎のバカはまだうちで寝ていますよ」

第二に注目すべき点は、〈同格1〉は非生産的だということである。三宅(2001:13-14)では、(3)に挙げた例のほかに「xのy」のyに当たる名詞として、「国」「旗」「歌」「日」「山」などを挙げているが、どれも非生産的で実例の中には余剰的な印象を与えるものもあると述べている。つまり、「花」「木」そして「町」以外は、yに使える名詞は非常に限定されているのである。「お母さんのバカ！」型の「xのy」はどうだろうか。yはマイナス評価の意味をもつ名詞に限られており<sup>6</sup>、xも人名を含めて呼びかけに使う呼称名詞に限定される<sup>7</sup>。このような制限はなぜ生まれるのだろうか。

- (8) x: 呼びかけに使う名詞(人名、呼称名詞、愛称など)  
{お父さん、お母さん、お兄さん、太郎、ゆきちゃん、先生、先輩、……}  
y: マイナスの評価を表す名詞  
{バカ、エッチ、助平、意気地なし、石頭、わからず屋、……}

### 2.3 「お母さんのバカ」型の名詞句のモダリティ

次に問題の名詞句のモダリティについて考えてみる。モダリティの定義は益岡(1991)に従い、「表現者の表現時での判断・表現態度を表す要素」(同書:34)と考える。そして、(1)に挙げた例文を見てわかるように、だれに向けて発せられたものかが了解されている状況のもとでは、「xのy!」の「y!」だけの一語文と同等の意味を有していると考えられる。一語文は「yだ」という述語を持たない点で、未分化文の一種だと言える(益岡・田窪1992:176)。

「お母さんのバカ!」型の名詞句は「{きのうは/きのうの}お母さんのバカ!」と言えないことから、表現時点での対象(x)に対する話者の「xはyである」という判断を表していると考えられるので、益岡(1991)の分類に従えば、恒常的に主観性を表現する「一次的モダリティ」<sup>8</sup>であり、かつ「真偽判断のモダリティ」<sup>9</sup>だと言える。発話の状況を考えると、通常は(1a~c)に見られるように、評価を下す契機となった事態の現場で発せられるが、(1d)のように、事態を回想して発せられる場合もある。しかし、いずれにしても発話時点での発話者の評価を表している点で一次的モダリティを有していると言える。これは別な見方をすれば、そもそも一語文で述語をもたず、テンスを表す言語形式がないため、「あいたっ。ちくしょう」(益岡・田窪1992:176)のように「表現時点での表現者の感覚・感情を表す」と同様の振る舞いをすると考えられる。それでは、なぜ「y(バカ)!」

だけで表現できるものに、「x（お母さん）」を付けるのだろうか。評価判断の対象がだれかを強調しているのだろうか。

### 3. 参照点能力と参照点構造

#### 3.1 参照点能力にかかわる認知プロセス

前節では「x の y」の同格の構造に注目して考察し、3つの問題点を提起した。本節では（9）にまとめた3つの疑問に対して、参照点能力と参照点構造の視点から答えを探ってみる。

- （9） a. 同格の「x の y」では、固有名詞（人名）を前に置いた「山岡の局長（が来た）」が成り立たない一方で、「太郎のバカ（が来た）」が成立するのはなぜか。
- b. 〈同格1〉の構造をもつ「x の y」の生産性が低いのはなぜか。
- c. 「バカ！」だけでも表現意図は通じるのに、評価対象である「お母さん」を付けて「お母さんのバカ！」と言うのはなぜか。

第2節で紹介した寺村（1991：238）では「～の～」について、「しかし、「なんでも結びつく」というのは、もちろん正しくない」と指摘し、（10）のようなペアは容易に意味が理解できるが、参与者の配置を反対にした（11）は理解が困難であると述べている。（例文は同書：238-239より。‘?’の判断も原文のまま）

- （10） a. カメラのレンズ
- b. 漫画家の加藤さん
- c. 首都の東京

- （11） a. ? レンズのカメラ
- b. ? 加藤さんの漫画家
- c. ? 東京の首都

なぜ上に示したような“適切な配置”があるのだろうか。それは人間が持っている参照点能力が参照点構造として言語形式に反映されているからだと考えられる（Langacker 1993, 1995 など）。参照点能力にかかわる認知プロセスは、図1のように規定される（Langacker 1993：6）。Cは認知主体で、Rが参照点、Tがターゲット、大きな楕円のDが参照点によって限定されるターゲットの支配領域である。破線の矢印はメンタル・コンタクトを示している。つまり、xを参照点（R）としてターゲット（T）であるyにメンタル・コンタクトするという認知的なスキーマがあるために、「x の y」という配置になると考えられる。

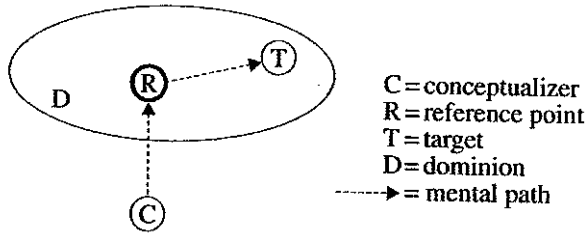


図1

### 3.2 参照点構造と同格の構造

参照点能力と言語現象について、山梨（2003：253）は（12）のように述べている。このような人間のもつ参照点能力の働きを踏まえて、本稿では（13）のような構図を想定する。

（12）一般に、われわれが何かをターゲットとして探索する場合、常に探しているターゲットとしての対象が直接的に把握できる保証はない。実際には、そのターゲットに到達するため参照点（すなわち、対象に到達するための手がかり）を認知し、この参照点を経由して、問題のターゲットとしての対象を認知していくのが普通の探索のプロセスである。この種の能力は一般的な認知能力のなかでもとくに重要な能力として注目される。

（13）人間がもつ認知能力と言語型式とのつながり

[外界] ⇒ (認知主体による解釈=事態の切り取り)

- ①人間がもつ参照点能力 [参照点 (R) → ターゲット (T)]
- ②参照点構造としての [x の y] (x : 参照点 y : ターゲット)
- ③表出 「x の y・・・」

このような考え方に立てば、(10a) が (11a) と違って、文脈の助けなしに自然に解釈できるのは、カメラとレンズの二者を関連づけるにあたって、[全体] から [部分] へという流れが、際立ちに基づいたメンタル・コンタクトの自然な流れになっているからだと言える。逆に言えば、(11a) も適切な文脈が与えられさえすれば、レンズを参照点に、カメラをターゲットにした関係を示すことができる。例えば、机の上に (片づけるのを忘れたと思われる) レンズだけが置かれていた場合、発見者が「このレンズのカメラはどこだ」と問うことは自然なことである<sup>10</sup>。

ところが、(11b, c) については、この配列で (10b, c) のような同格の解釈を受けることはできない。(11b, c) が不成立であることは、問題提起の (9 a) に通じる。人名や地名などの固有名詞が前に来るような同格の形式が許容しがたい理由を、参照点能力にかかわる認知プロセスを導入して、次のように考えてみる。(14a, b) は広い意味で所有者と所有物の関係で、〈存在物〉がターゲットとなり、それを特定するために、〈存在物〉の〈場所〉を参照点に設定している。これをタイプ I と呼ぶ。

(14)	参照点 (x)	ターゲット (y)	表現【参照点構造「xのy」タイプ I】
a.	山田さん	→ 本	: 山田さんの本
b.	山田さん	→ 奥さん	: 山田さんの奥さん
c.	医者	→ 山田さん	: 医者の山田さん (同格2の用法)
d.	山田さん	→ 医者	: #山田さんの医者 <sup>11</sup> (同格2の用法)

所有者を参照点にとるのは、認知プロセス上、自然な流れであるが<sup>12</sup>、(14c)は〈同格2〉で、属性を表す名詞が参照点になりその属性を所有する主体がターゲットになっている。一見(14a, b)とは反対になっているように思われるが、参照点が「ターゲットの存在する場」として捉えられている点では同じなのである。この場合、図2で示したようにターゲットは参照点の中にある。(14c)は参照点が属性であるがゆえに同格の解釈をうけるが、(14d)は同格の解釈をもたない。自然な解釈は(14a, b)と同様に所有者と所有物の関係で捉えられ、「山田さんを診察する医者」または「山田さんのかかりつけの医者」になる。「山岡の局長」「加藤さんの漫画家」「東京の首都」が解釈不能に陥るのは、このようなタイプIの認知的把握が困難だからである<sup>13</sup>。

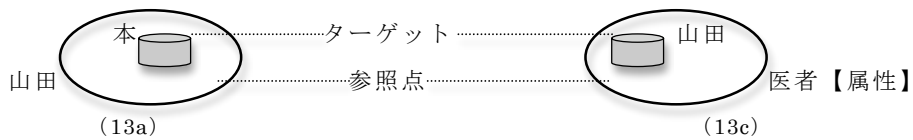


図2 参照点構造「xのy」タイプIの認知的把握

### 3.3 2つの同格の用法の違い

それでは、なぜ「太郎のバカ(が〜)」は解釈が成立するのか。それは人名が前置されていても参照点構造が成立するからだと言える。本稿では(14)とは異なる参照点構造を考える。それを説明する前に、上で解釈不能に陥ると述べた3つの例について、「〜の〜」で言える場合があることを確認しておく。それは〈例示〉の用法になっている場合である。

- (15) a. (佐藤や) 山岡などの局長は・・・  
 b. (佐藤さんや) 加藤さんなどの漫画家は・・・  
 c. (ロンドンや) 東京などの首都は・・・

〈例示〉の「xなどのy」は「xはyである」ことを前提にはいるが、「種(x)と類(y)」の関係になっている点で、〈同格1〉および「太郎のバカ(が〜)」と共通している(図3参照)。つまり、この3つは具体例(x)が参照点となり、カテゴリー(y)がターゲットとなる参照点構造を有していると考えられる。これを「タイプII」と呼ぶ。xの名詞が参照点として選択される理由を「伝達機能」によるものと考え、(16)のように参照点構造と併せてまとめておく。

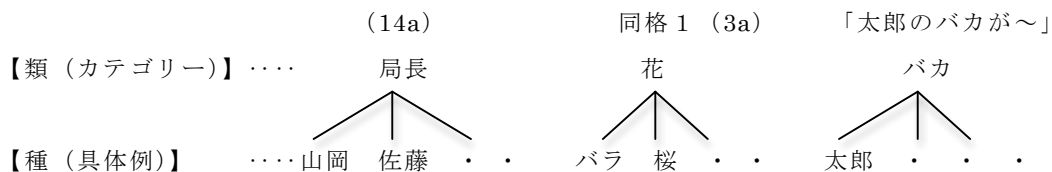


図 3 「x の y」と「種と類」の対応

(16)	参照点 (x)	→	ターゲット (y)	表現【参照点構造「x の y」タイプ II】
a.	山岡など	→	局長	: 山岡などの局長 (が来た) 【伝達機能】〈名称を例として提示〉
b.	バラ	→	花	: バラの花 (を買う) 〈同格 1〉 【伝達機能】〈名称提示〉 ⇒バラという名前の花 (を買う)
c.	太郎	→	バカ	: 太郎のバカ (が来た) 【伝達機能】〈名称提示〉 ⇒太郎という名前のバカ (が来た)

(16c) が意味していることは、「太郎が来た」では、「太郎」が特定の個体を指示する名詞として働いているが、「太郎のバカが来た」では、「太郎」はそのような働きを失い<sup>14</sup>、単に「太郎」という名前を表す名詞になっているということである。これは (16b) の〈同格 1〉にも当てはまる。以上の分析から〈同格 1〉と〈同格 2〉と呼んだ「x の y」は次のようにまとめることができる。

(17) 同格 1 : 〈名称〉が参照点となり、その名称の個体が属するカテゴリーがターゲットになる参照点構造 [タイプ II] になっている。x と y は種と類の関係で、「x の y」は y に属する個体の名称を提示するという伝達機能をもつ。

同格 2 : 〈属性〉が参照点となり、その属性を所有する個体がターゲットになっており、〈場所〉と〈存在物〉の関係になっている参照点構造 [タイプ I] の一種である。

ここで (9b) の疑問について考えてみる。(17a) でまとめた〈同格 1〉の構造は、通常は「～という (名前の)」で示されるべきもので、ほとんどの場合「x の y」では言えず、またそのように言う必要がないものが多い。つまり、本来は「という」で示される〈名称提示〉を連体助詞の「の」で直接結ぶため、生産性が低く、使える名詞が限られていると考えられる。

- (18) a. \*まぐろの魚を食べる。 (cf. 「まぐろという魚」、または単に「まぐろ」)  
b. \*地球の惑星に住む。 (cf. 「地球という惑星」、または単に「地球」)



しかし、「太郎のバカ（が来た）」は、(16) に示したように〈同格1〉と同じ構造と伝達機能をもつとはいっても、やや性質を異にする。(16b) は、同じ出来事を3つの言い方で表現できるが(19a～c)、③だけが①②より伝達される情報量が少ない。一方(20)の「太郎のバカが来た」では、②'も③'も単独では①'の情報量を伝えることができない。

(19) a. バラの花を買う。 ①「xのyを～」 (=16b)

b. バラを買う。 ②「xを～」

c. 花を買う。 ③「yを～」

d. 情報の伝達量：①=② > ③

(20) a. 太郎のバカが来た。 ①'「xのyが～」 (=16c)

b. 太郎が来た。 ②'「xが～」

c. バカが来た。 ③'「yが～」

d. 情報の伝達量：①' > ②'、③'<sup>15</sup>

この違いは、現実の世界の知識として「バラは花の一種である」は共有される情報だが、「太郎はバカの一類である」はそうではないという違いに起因する。つまり、同じ「種と類」の関係で同格の構造をもつといっても、「バラの花」では、「xはyだ」という命題が前提であるが、「太郎のバカ（が～）」では、その命題そのものが伝達情報として重要だということである。そこで、〈同格1〉を次のように規定しなおす。

(20) 同格1：

〈名称〉が参照点となり、その名称の個体が属するカテゴリーがターゲットになる参照点構造[タイプII]になっている。xとyは種と類の関係で、「xのy」はyに属する個体の名称を提示するという伝達機能をもつ。「xのy」の伝達情報の点から2つに分類される。

1) 「バラの花」型：

「xがyの一種である」が世界知識として共有されており、「x」だけでも基本的な伝達情報量に差がない。

2) 「太郎のバカ」型：

「xがyの一種である」が世界知識として共有されておらず、「x」または「y」だけでは基本的な伝達情報量に差が出る。「xがyである」という情報の伝達が重要である。また、〈名称提示〉は本来「という」という形式で表されるべきものなので、「の」を使った同格の構造は生産性が低く、限定された名詞にのみ成立する。

#### 4. 「お母さんのバカ！」の分析

4.1 「お母さんのバカ！」の参照点構造

第3節では「太郎のバカが来た」の「太郎のバカ」を、参照点構造の中で分析することによって問題提起した(9 a, b)の答えを導き出した。これで「お母さんのバカ！」の分析の準備が整ったことになる。(16)で示した構造をもとに、「お母さんのバカ！」型の参照点構造を、まず(22b)のように考え、残された(9 c)の問題について考えてみる。なお(22)では、前節の内容と比較するために「お母さん」ではなく、「太郎」にしておく。

(22)	参照点 (x)	→	ターゲット (y)	表現【参照点構造「xのy」タイプII】
a.	太郎	→	バカ	: 太郎のバカ (が来た) 【伝達機能】〈名称提示〉 ⇒太郎という名前のバカ (が来た) 【伝達情報】「太郎はバカだ」
b.	太郎	→	バカ	: 太郎のバカ! 【伝達機能】〈名称提示〉 ⇒太郎という名前をもつバカ 【伝達情報】「太郎はバカだ」

(22b)の構造は(22a)をそのまま当てはめただけのものである。基本的にこのような構造を有していると考えられるが、実際の発話の場面を想定すると、このような認知プロセス以上のものが行われていると考えられる。その違いは「表現者の発話時における心的態度の表明」というモダリティの要素が「xのy」にあるかどうかである。(22a)では「太郎のバカ」は主語になっており、真偽判断のモダリティは文末の「～た」にある。つまり、「太郎はバカである」ということが、(世界知識ではないが、話し手にとっては)所与のことであり扱われ、「太郎という名前のバカが来た」と語られている。それに対して、(22b)では「太郎のバカ」のみで「太郎はバカである」という発話時の発話者の評価を表し、真偽判断のモダリティが現れている。そこで、(22b)の構造に「判断のプロセス」を組み込んだ構造を考え、これを「タイプII-w」と呼ぶ(23)。例は「お母さんの～」に替えてある。

(23)	参照点 (x)	→	ターゲット (y)	表現【参照点構造「xのy」タイプII-w】
	お母さん	→	バカ	: お母さんのバカ! 【伝達機能】〈名称提示〉 ⇒お母さんという呼称をもつバカ 【伝達情報】「お母さんはバカだ」
	〈判断対象〉		〈判断結果〉 …… 【判断のプロセス】	

4.2 「お母さんのバカ！」型の未分化文を生み出す認知プロセス

(23) に示したような〈判断対象〉が参照点になり、〈判断結果〉がターゲットになるような認知プロセスとは、一体どういうものなのだろうか。これを考えるために、認知文法のランドマーク (lm) とトラジェクター (tr) の概念<sup>16</sup>を導入する。「お母さんがバカであるコト」という命題において「お母さん」が主語になることから、「x の y」の x がトラジェクター (tr) として、y がランドマーク (lm) として認識されていると考えられる。そして重要なのは、図 4 に示したように、lm と tr において、プロファイルされているものと実際に指しているもの (=アクティブゾーン: az) との間にメトニミー的にズレが生じることが多いことである<sup>17</sup>。



図 4 Langacker (1993:31) より

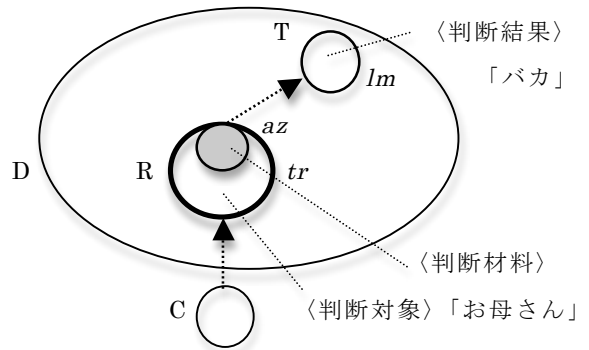


図 5 tr と lm と参照点構造

この概念を「お母さんのバカ！」に応用すると、図 5 における tr が「お母さん」で、メトニミー的に指し示す az が お母さんの行動だと考えられる。つまり、参照点 (R) の「お母さん」は潜在的に主題となる要素を持ち合わせながらも、動的なメンタル・コンタクトにおいて、「お母さん」が帰属するカテゴリー (T) を決定する上での 判断材料 となっているのである。この認知プロセスは (24②) の (i) と (ii) に示したように [タイプ II] の参照構造と判断プロセスの参照点構造の二層構造であると考える。

(24) 「お母さんのバカ！」型の「x の y」が生まれる認知プロセス (図 5 を参照)

① 契機:

発話者 (= 認知主体: C) は、母親が関与するある出来事に遭遇し、母親に対してマイナス評価の感情を抱く。

② 「x の y」の参照点構造の形成: タイプ II-w (二層構造)

(i) 〈名称提示〉の伝達機能をもつ「x の y」の形成・・・[タイプ II]

⇒ 「x=種: 具体例」と「y=類: カテゴリー」

母親 (x) が参照点 (R) となり、その名称の個体が属するカテゴリーがターゲット (T) になる参照点構造が形成される。

(ii) 判断のプロセスを表す「x の y」の形成

⇒「x=判断対象」「az=判断材料」と「y=判断結果」

発話者 (C) は、参照点 (R) に設定された母親 (x) の属するカテゴリーを判断するにあたり、母親の行動 (az) をその判断材料にする。az を通して母親が属するカテゴリーが決定することは、メンタル・コンタクトがターゲット (T) に到達することを意味する。

③ 表出：「お母さんのバカ！」

#### 4.3 分析のまとめ

「お母さんのバカ！」型の「x の y」を、同格の用法を手がかりにして、最終的には認知プロセスが反映した参照点構造によって分析した。この型は、「x=種」と「y=類」の関係をもつという点では、「バラの花」型と同じで、「x の y」が〈名称提示〉の伝達機能をもつのだが、「x=判断対象」「az=判断材料」と「y=判断結果」の関係を持ち、判断のプロセスが直接反映された参照点構造になっている点で、「バラの花」型とは異なると言える。このような二層の参照点構造 [タイプ II-w] をもつことが「お母さんのバカ！」型を他の同格の形式と区別している最大の要因だと言える。つまり、このような未分化文が成立するには、現場性（「いま・ここ」）が必要であり、「きのうは、お母さんのバカ！」という発話は起こりえないし、「お母さんのバカ！」というのを聞いた（状況に直接関与しない）第三者が「そうね。お母さんのバカ」と言うのも間が抜けた印象を与える。現場に身を置いている主体が、参照点を経由して、ターゲットに向かう動的なメンタル・コンタクトのプロセスを直接的に表現したものが「お母さんのバカ」という表現なのである。メタフォリカルな言い方をすれば、メンタル・コンタクトの現れをそのまま「コト図式」<sup>18</sup>にはめ込んだ、ハダカの発話（句）だと言える。

結果的に「お母さんのバカ！」は「お母さんはバカだ」という伝達情報をもつのだが、「主題（は）+コメント」のように主題をコト図式から切り出すことなく、「いま・ここ」の状況において、対象に対する判断のプロセスを、参照点構造を作り出すプロセスに重ね合わせて作り出された未分化文だと結論づけることができる<sup>19</sup>。重要なことは、x と y を「の」で繋ぐことで、あえて x をコト図式の中に留まらせるのである。そうすることによって、参照点を判断材料にして、ターゲットである範疇を決定するという図式を形成し、現場の生の判断を認知のプロセスのまま語ることができるのである。

#### 5 結語

「お母さんのバカ！」型の名詞句の「の」の働きを参照点構造によって考察した。参照点構造を生み出す参照点能力は人間がもつ認知能力の1つで、どの言語にも程度の差こそあれ、反映されていることは確かである。日本語は、言語類型論的に言って参照点構造が強く言語型式に反映される言語だという指摘がある<sup>20</sup>。本稿で分析した [タイプ II-w] の「x の y」もその1つの現れだと考えられる。

「お母さんのバカ」型の「x の y」では、マイナス評価の名詞句が y にくるという制限がある。しかし、勝負の場面で使われる「太郎の勝ち（負け）！」という一種の宣言文のような名詞句の存在も

お母さんのバカ！」型と無関係ではないように思われる。確かに元々は単なる動詞と補語の関係が連体助詞によって名詞句に変換されたものだったのであるが（「この分では[太郎の勝ち]は間違いなし」など）、「勝負という現場で太郎の動作・出来事（=R：参照点）を通じて、太郎が勝ちか負けのどちらの範疇（=T：ターゲット）に帰するのかを述べる」という動的なメンタル・コンタクトのプロセスを想定すれば、「お母さんのバカ！」と接近した使い方になっていると言えるのではないだろうか。名詞の制限についてのさらなる分析と、宣言的な「～の勝ち／負け！」とのつながり、そして通時的にみた「お母さんのバカ！」型の位置づけなどについては今後の課題としたい。

## 註

- 1 本稿で扱う「お母さんのバカ！」型の「xのy」は「yだ」のような述部をもたず、名詞句のみが発話される。そこで、単なる句の提示と区別するために「！」を付けておく。
- 2 管見では「お母さんのバカ！」型の連体助詞の「の」の用法を分析している先行研究はなかった。
- 3 「シェークのバニラ」「牛井の大盛り」などの例を挙げているが、これらは主要部後置型でも同じ意味を表せると述べている。（三宅 2001：15）
- 4 同じ「xの花」の構造でも「かぼちゃの花」は花を主要部にもつ修飾関係である（三宅 2001：12）と指摘している。これは「全体と部分」の関係になっており、同格型の例に入っている「松の木」も文脈によっては、「松の根」に対して「木」の部分を目指すのであれば、主要部後置型になるだろう。
- 5 2つの同格の用法を言及したものは、山田（2004）がある。ここでは『「会長の田中氏」と「バラの花」はどちらも同格と呼ばれ、前の名詞と後ろの名詞は同等です。違いは「会長の田中氏」は「田中氏」を、「バラの花」は「バラ」を言いたいときに使うことです。』と述べている。（p.44）
- 6 現代語の用法を見る限り、「太郎の天才！」のよう使い方は、あったとしても特殊な効果を狙った奇抜な表現のような印象を与える。
- 7 ただし、人から組織への拡張、さらには人が所属する母体への拡張を考慮すれば、例えば「外務省のバカ（野郎）！」なども考えられる。
- 8 一次的モダリティとは、過去のテンスなどによって客観的な表現になることがない、典型的なモダリティ要素のことである。日本語の助動詞の場合「だろう」がその例として挙げられる。（益岡 1991：35-36）
- 9 真偽判断のモダリティとは「対象となる事柄の真偽に関する判断を表すモダリティ」である（益岡 1991：51）
- 10 Langacker（1993：10）は、「猫のノミ」と「ノミの猫」を挙げて同様の説明をしている。
- 11 ‘#’は、この文が同格の用法としては非文になることを示している。
- 12 参照点となるのはターゲットよりも際立ちが高く、心的アクセスが容易なものである。したがって、特別な文脈がなければ、「全体」が「部分」よりも、また「所有者」が「所有物」よりも参照点になるのが自然な流れとなる。（Langacker 1993：8）
- 13 山岡という人物と何らかの関係をもつ局長が存在し、その関係を指して「山岡の局長」と表現することは可能だが、そのような関係を想起することは非常に困難である。「加藤さんの漫画家」は、無理に参照点構造で解釈すれば、「加藤さんという人物を描いている漫画家」という解釈は可能である。
- 14 固有名詞でさえも指示的な機能を持たなくなる場合があることは、西山（2003：62）でも指摘されている。
- 15 ②'と③'は情報量の点から見れば、どちらも①'より相対的に少ないと言える。②'と③'は情報の質が異なり、情報量の差についてはここでの議論には関係しない。
- 16 参与者間で最も際立ちが高いものがトラジェクター（tr）で、次に際立ちの高いものがランドマーク（lm）である。統語上では、トラジェクターが主語に、ランドマークが目的語に相当する。（Langacker 1987）
- 17 図4の例としては、「太郎がみかんをむいた」（実際にむいたのはみかんの皮）や「トランペットを聴いた」（実際に聴いたのはトランペットから出た音）などがある。また、「イヌが太郎に近づいた」はlm/trがazと一致する例だが、このように一致することのほうがめずらしいと考えられている。
- 18 深谷・田中（1996）で使われている用語で、述部が要請する命題の枠組みのことである。
- 19 Langacker（1993）では、日本語の「主題＋解説」の構文について触れ、「Xは」が参照点になっていることを示している。しかし、参照点という点で同じだとしても、コト図式から切り出されるかどうかの違いが、意味に大きな違いをもたらすというのが本稿の考え方である。
- 20 中村（1998）では、際立ち（トラジェクターとランドマーク）と参照点構造（参照点とターゲット）の2つのうちどちらがより言語型式に反映するかを考察し、英語は際立ちに、日本語は参照点構造に敏感に反応する言語だとしている。

参考・引用文献

- Langacker, R. W. (1987) "Foundations of Cognitive Grammar. Vol.I). Theoretical Perspective." Stanford Univ. Press
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38
- Langacker, R. W. (1995) "Possession and Possessive constructions," In John R. Taylor, Robert E. MacLaury (ed.) *Language and the cognitive construal of the world* :51-79
- 高橋太郎他 (2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中村芳久 (1998)「認知類型論の試み: 際立ち vs. 参照点」『Kansai Linguistic Society: Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society: KLS』18 256-262
- 西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 西山佑司 (2004)「名詞句の意味と連体修飾」『日本語学』23 (3) 明治書院 18-27
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996)『コトバの<意味づけ論>』紀伊国屋書店
- 益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (2004)「日本語の主題 —叙述の類型の観点から—」『主題の対照』くろしお出版 3-17
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松岡弘 (監修) (2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 三宅知宏 (2001)「「主要部」の概念と“XのY”型名詞句」『鶴見大学紀要国語国文学篇』38 (左) 9-18
- 山田敏弘 (2004)『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版
- 山梨正明 (2000)『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 (2003)「焦点連鎖と参照点能力からみた言語と認知のメカニズム」『市河賞 36年の奇跡』開拓社 252-270